



TITLE:

陰茎リンパ管腫の1例

AUTHOR(S):

竹山, 政美; 高, 栄哲; 近藤, 宣幸; 土井, 康裕; 藤岡, 秀樹; 時実, 昌泰

CITATION:

竹山, 政美 ...[et al]. 陰茎リンパ管腫の1例. 泌尿器科紀要 1989, 35(3): 523-525

ISSUE DATE:

1989-03

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/116454>

RIGHT:

陰茎リンパ管腫の1例

健保連大阪中央病院泌尿器科（部長：藤岡秀樹）

竹山 政美*, 高 栄哲, 近藤 宣幸

土井 康裕**, 藤岡 秀樹

時実クリニック（院長：時実昌泰）

時 実 昌 泰

A CASE OF LYMPHANGIOMA OF PENIS

Masami TAKEYAMA, Eitetsu KOU, Nobuyuki KONDOH,
Yasuhiro DOI and Hideki FUJIOKA

From the Department of Urology, Osaka Central Hospital

Masayasu TOKIZANE

From the Tokizane Clinic

A 9-year-old boy was seen with chief complaint of a penile mass with pain. The movable mass was palpable in the subcutaneous tissue of the penis apart from the median raphe. The mass was excised en bloc. Histological examination revealed that the mass was a lymphangioma of penis consisting of several endothelial-lined cysts. Convalescence was uneventful. Eighteen cases of lymphangioma or lymphangiectasia of penis including the present case in the Japanese literature are reviewed.

(Acta Urol. Jpn. 35: 523-525, 1989)

Key words: Lymphangioma, Penis

はじめに

リンパ管腫は比較的稀な良性腫瘍で、頭頸部や上肢に発生することが多いとされており、陰茎に発生を見ることがきわめて稀である¹⁾。われわれは最近、陰茎に発生した1例を経験したので報告する。

症 例

患者：9歳、男性

初診：1987年1月14日

主訴：陰茎腫瘍

家族歴：特記すべきことなし

既往歴：特記すべきことなし

現病歴：1987年1月7日、陰茎包皮の有痛性腫瘍に気づき、時実クリニックを受診し、試験切除を勧めら

れ当科に紹介され入院となる。

入院時現症：身長 140.6 cm, 体重 42.5 g, 血圧 100/54 mmHg, 脈拍60整, Fig. 1 に示すように右陰茎腹側に縫線とは離れた位置に、一部暗青色の可動性の腫瘍を触知した。その他の理学的所見に異常を認めなかった。

入院時検査成績

末梢血液所見：RBC $482 \times 10^4/\text{mm}^3$, WBC $5,300/\text{mm}^3$, (好酸球 4%, 好塩基球 2%, 好中球 52%, リンパ球 39%, 単球 3%), Plt $13.3 \times 10^4/\text{mm}^3$, Hb 14.3 g/dl, Ht 41.4%

血液化学所見：Na 140 mEq/l, K 4.7 mEq/l, Cl 105 mEq/l, Ca 4.7 mEq/l, TP 7.0 g/dl, Cr 1.1 mg/dl, BUN 17.3 mg/dl, AIP 19.2 KAU, GOT 33 KU, GPT 16 KU, LDH 457 U

尿所見：pH5.0, 蛋白(－), 糖(－), 潜血(－), RBC 1-3/hpf, WBC 0-1/hpf, 扁平上皮 少数,

*：現市立堺病院泌尿器科

**：現兵庫医科大学泌尿器科

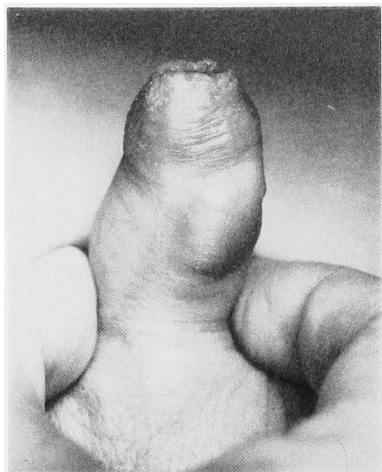


Fig. 1. 腫瘍は一部暗青色で右陰茎腹側の陰茎縫線とは離れた位置にあり、可動性は良好であった。

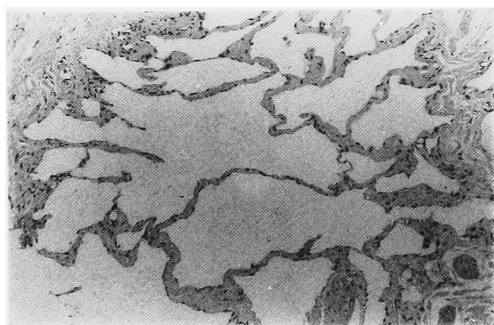


Fig. 2. 組織標本 (H.E. 染色 33x): 腫瘍は薄い壁を持つ多くの cyst よりなり、内層は一層の内皮細胞で被覆されている。

円柱 (-),
手術

1987年1月21日、陰茎腫瘍摘除術を施行した。術中、腫瘍は一部周囲組織と癒着しており、腫瘍壁の一部が破れ、内部より血性の液体の流出が見られた。

病理組織学的所見

腫瘍は薄い壁を持つ数個の cyst より成っており、内層は一層の内皮細胞で被覆されており (Fig. 2), cystic lymphangioma と診断した。幼少時より存在した lymphangioma に何らかの原因で出血をきたし痛みが出現したものと考えられた。術後経過は良好で、現在に到るまで異常を認めていない。

考 察

リンパ管腫は、リンパ組織の congenital malformation と考えられており、通常、頭部、頸部、上肢

Table 1. リンパ管腫の分類 (大矢, 1969)

1) 単純性リンパ管腫	後天性 (いわゆるリンパ管拡張症 またはリンパ管瘤)
2) 限局性リンパ管腫	先天性(母斑症)
3) 海绵様リンパ管腫	
4) 囊腫性リンパ管腫	
5) 瀰漫性リンパ管腫	先天性または後天性 (象皮病およびその類症)

に発生することが多いとされている¹⁾。Watson & Watson & McCarthy によれば、61%は生下時にすでに認められ、95%は10歳以下で認められるとされている²⁾。陰茎に発生したリンパ管腫は稀であり、本邦では、ほとんど報告をみない。しかしながら一方、大矢は先天性のリンパ管腫と後天性に何らかのリンパの鬱滞をきたしたリンパ管拡張症を厳密に区別することは困難であるとし、リンパ管拡張症を単純性リンパ管腫とし、瀰漫性リンパ管腫を加え Table 1 のように分類している³⁾。このようにリンパ管拡張症をリンパ管腫に含めると Table 2 に示すように本邦で過去に17例の報告があり、自験例は18例目と考えられる。年齢的には成人がほとんどで、発症部位は冠状溝付近に多く、大部分が後天性のリンパ管拡張症の範疇に入るものと考えられ、先天性と考えられるのは、猪野毛らの症例および、血管腫との混合型であるが、泉らの症例の2例のみではないかと考えられる。自験例では、年齢が9歳で cystic な構造であり、組織学的に cyst wall が一層の内皮細胞に被われ、弁の存在も認められたため、先天性の cystic lymphangioma と診断した。

また、自験例では陰茎縫線囊腫との鑑別が問題となるが Table 3 に示したように陰茎縫線囊腫は陰茎縫線上、外尿道口あるいは包皮小帯に発生し、組織学的には cyst wall が円柱上皮、扁平上皮、移行上皮、あるいは、それらの混合型など、上皮より成る⁴⁾のに対し、自験例では腫瘍は陰茎縫線より離れた位置にあり、組織学的に cyst wall は一層の内皮細胞に被われ、鑑別は容易であった。リンパ管腫の治療は外科的腫瘍摘除術が唯一の治療法とされており、切除不十分であれば、再発、リンパ液漏出などをきたすとされている。自験例では腫瘍摘除術後、現在に到るまで再発、その他の異常を認めていない。以上、陰茎リンパ管腫の一例を経験したので報告した。

本論文の要旨は第119回日本泌尿器科学会関西地方会(1987年6月)において発表した。

Table 2. 陰茎リンパ管腫 (リンパ管拡張症) の症例

報告者	報告年	年齢	部位	診断	報告誌(巻, 頁)
1. 北川	1928	21	冠状溝	リンパ管腫	病理と治療(2, 78)
2. 近藤ら	1955	?	冠状溝下縁	リンパ管拡張症	日泌誌(46, 488)
3. 近藤ら	1955	?	冠状溝下縁	リンパ管拡張症	日泌誌(46, 488)
4. 村上	1956	24	陰茎背面根部 ~左側冠状溝	リンパ管拡張症	日泌誌(47, 593)
5. 山際	1962	32	冠状溝全周	リンパ管拡張症	日泌誌(53, 502)
6. 高橋ら	1968	35	陰茎皮下	硬化性リンパ管拡張症	臨泌(22, 412)
7. 高橋ら	1968	33	陰茎皮下	硬化性リンパ管拡張症	臨泌(22, 412)
8. 猪野毛ら	1968	38	冠状溝	囊腫性リンパ管腫	日泌誌(59, 537)
9. 豊田ら	1969	27	冠状溝	リンパ管拡張症	日泌誌(60, 171)
10. 豊田ら	1969	21	冠状溝	リンパ管拡張症	日泌誌(60, 171)
11. 豊田ら	1969	27	冠状溝	リンパ管拡張症	日泌誌(60, 171)
12. 豊田ら	1969	33	冠状溝	リンパ管拡張症	日泌誌(60, 171)
13. 豊田ら	1969	35	冠状溝および 体部右側根部	リンパ管拡張症	日泌誌(60, 171)
14. 大矢	1969	45	陰茎皮下	リンパ管腫(リンパ管拡張症)	臨泌(23, 397)
15. 鶴田ら	1975	23	陰茎背面 冠状溝側面	硬化性リンパ管拡張症	日泌誌(60, 175)
16. 金川ら	1978	25	左側冠状溝	リンパ管拡張症	日泌誌(69, 1115)
17. 泉ら	1985	31	陰茎皮下より 白膜に到る	陰囊内および陰茎の血管 腫, リンパ管腫の混合型	泌尿紀要(31, 159)
18. 自験例	1987	9	陰茎体部腹側	囊腫性リンパ管腫	

Table 3. 陰茎リンパ管腫 (自験例) と陰茎縫線囊腫との鑑別

	陰茎リンパ管腫 (自験例)	陰茎縫線囊腫
発生部位	冠状溝付近に好発 (縫線と離れた) 腹側皮下	陰茎縫線上 外尿道口 包皮小体
組織像	囊胞壁は一層の内 皮細胞に被われる。 弁が存在する。	囊胞壁は円柱上皮, 扁平上皮, 移行上 皮あるいは混合型 など上皮より成る。

文 献

- 1) Bill AH Jr and Sumner DS: A unified concept of lymphangioma and cystic hygroma. Surg Gynecol & Obst 120: 79-86, 1965
- 2) Watson WL and McCarthy WD: Blood and lymph vessel tumors. Surg Gynecol & Obst 71: 569-588, 1940
- 3) 大矢正巳: 陰茎のリンパ管腫 (リンパ管拡張症). 臨泌 23: 397-399, 1969
- 4) 荷見圭子, 柴田敦子, 徳田安章: Cyst of the Penile Raphe の3例. 臨皮 39: 155-160, 1985 (1988年3月28日受付)